

平成 29 年度

## 外国語教育強化拠点事業 公開研究会

～アンケートの質問から～

### 小学校

- ① 小学校では限られた時数の中で、どのように70時間の時数を確保しているのか。  
→クラブ活動や委員会活動のない週の時数をあてるなどして、時数を捻出しています。
- ② ホームルームイングリッシュを、どのように扱っているのか。  
→年度初めに、学級で扱いたいクラスルームイングリッシュ一覧を配付して共通理解を図っています。
- ③ リアクションの在り方をどのように指導しているのか。  
→やり取りを行う中で、教師がリアクションを示したり、子供のよいリアクションを取り上げて広めたりしながら、リアクションの種類を増やせるようにしています。
- ④ 小学校5・6年生と中学校1年の連携とは、具体的にどのように連携しているのか。  
→6年生で、年度末に中学校の英語教師が小学校でT2に入って小学校の先生で授業を行ったり、小学校6年生が中学校へ英語の授業を参観に行ったり、中学校1年生が小学校へ来て6年生に英語で中学校の様子を紹介して交流したりするなどの取組を行ってきました。
- ⑤ 小・中の連携の在り方について、どのような連携が有効であったか。また、研究を進めた上で分かってきたことはどのようなことか。  
→教員の乗り入れ授業はもちろんのこと、小・中学校の教員が定期的に顔を合わせて授業の様子や評価のことについて情報を共有することが有効でした。
- ⑥ 小学校高学年の書く活動について、どのような段階を踏んで文を書いたり、単語を書いたりする指導をしているのかが知りたい。  
→まずは、音声でのインプットを十分に行うことを意識しています。その後、発話ができるようになったら、文字を意図的に提示するなどして、聞く→話す→読む→書くのステップを踏むことを意識して、指導計画を作成しています。

- ⑦ 小学校では、warm-upでどのような活動をしているのか。  
→特に高学年では、学んだ言語材料を繰り返し使用する機会を増やすことをねらい、'How are you?'timeの中に、挨拶以外に質問することを約束として、テーマを設けて質問をさせたり、単元に関わる内容を入れさせたりするなどしています。
- ⑧ 振り返りカードや単語・文を書く際、指導者がHRTとALTが机間指導でどのように指導しているのか。ALTはどの程度評価に関わっているのか。ALTは、英語でコメントしているのか。  
→英語の授業の指導は、担任が必ずT1で行っているため、振り返りカードの確認は担任が必ず行っています。高学年の評価に関しては、学期末にALTと対話形式のスピーキングチェックの際、子供とALTの対話の様子をHRTが見取り、評価を行っています
- ⑨ 絵カードの文字に4線が入っていた。どのようなものを使っているのか。  
→これまでは、市販ソフト(有料)を利用してきましたが、新年度からは文部科学省が提示している4線やフォントを用いていく予定です。
- ⑩ 振り返りカードが5・6年で同じ物を使っていたが、低・中学年はどのような形で振り返りを行っているのか。  
→低学年では、カードを利用した振り返りは行っていないが、中学年では高学年と同様のカードを使って振り返りを行っています。
- ⑪ H27年の3年間で、現5年生(3年生から実施)現6年生(4年生から実施)で、指導の在り方や計画の立て方で留意したことは何か。  
→同じ言語材料を繰り返し使用していけるようにしたことや、発達の段階に応じて興味をもてるような内容を盛り込んだことです。
- ⑫ 名前の書き方について。なぜ名字が大文字なのか。  
→表記の方法は様々ありますが、海外からの来客も多いこともあり、どちらがファーストネームであるかが明確になるようにというねらいから、本校では名字(ファミリーネーム)を大文字で表記する方法をとっています。
- ⑬ 新教材のWe Canの活用について、詳しく知りたい。  
→これまでの作成してきた中学年35時間、高学年70時間の指導計画をベースにして、新教材に出てきた新たな言語材料や活動内容を取り入れて作成しました。

⑭ 苦手意識を持つ児童に対して、どのような手立てがあるのか。

→低学年から楽しく取り組める内容にしたり、目的意識を持たせたりするなど、単元の作り方を工夫しています。学年が上がるにつれ、習いごととして学習する子供も増え、差がでてくるため、子供たちの差を埋める内容や指導方法については、現在も模索しています。

⑮ 小・中・高校で連携を進めていく上でどのような苦労があったのか。その苦労や課題をどのように乗り越えてきたのか。また、高校を巻き込むためにどのようにしていったのか。

→全く違う校種が集まっていたので、初めは情報交換をしたり授業を見合ったりすることからスタートしました。情報交換の話し合いを重ねることで、互いの校種毎のねらいや指導方法、置かれた状況などについての理解が進み、新しくスタートする小学校の指導について、中・高の立場から多くのヒントやアドバイスをもらえたことが大きな成果でした。難しかったのは、スケジュールを調整でしたが、直接話し合えない際は、メールなどのやり取りで情報を交換してきました。

## 中学校

⑯ 中学校では、学年が上がるにつれて、受験があるために読む・書くに力点が置かれ、決められた文法や表現に縛られがちであるが生徒達に対するコミュニケーションを重視した指導の在り方について、どのようなことを意識しているのか。

→普段から簡単なテーマを設け、ペアやグループで会話し、全体で共有する活動を習慣化しています。発表の機会があるかもしれないと思うと、生徒はペアの段階でどんな英語を使えばいいかしっかりと考えます。この流れが定着していくと、3年生後半に読む・書くに重点が置かれるようになって、読んだことや書いたことを基にコミュニケーションを図ることが可能であると思います。

⑰ 英語の書く能力の育成が課題なので、どのような手立てがあるのか複数知りたい。

→何のために書くのか、目的をはっきりさせた活動を心掛けています。手紙を書くなら誰にどのような手紙を書くのか対象を明確にし、レポートや意見文なら Class Book を作ることや本にして図書室に置くことなどです。作品は添削して清書もさせます。大変な作業になりますが年に数回でも実践できると、生徒自身が成果を見て、意欲も高まるものと考えています。

⑱ 評価の実際や単元末の言語活動をどのように組み立てているのかを知りたい。

→言語活動の前にはモデルを提示することが多いので、生徒にとって評価の一つの基準になっています。単元構成は、まとめの活動に向かって、そこで必要な力を身に付け、または向上させていくよう意図的に計画を立てています。生徒の反応により、単元途中での修正も必要です。

⑩ 中学校3年の文法事項の説明は、英語で行っているのか。また、その場合の定期テストはどのようなものなのか。(質問等も英語なのかなど。)

→必要なときには日本語も使いますし、板書も日本語も使います。生徒の実態や学習段階に合わせて、少しずつ使用する英語を増やします。絵や写真を使ったり既習事項と比較させたりすることで、英語を使って導入できる部分もあります。定期テストは一般的なものだと思います。設問は日本語です。

⑪ 授業で継続して取り組んでいることがあれば知りたい。(課題・宿題など)

→ノートに教科書本文を写し、単語を調べ、和訳することを家庭で行う予習としています。音読やパターンプラクティス等の練習を宿題にすることもあります。授業では、冒頭でのスピーチ発表やテーマを決めての対話を帯活動としています。

⑫ 主体的に考えて取り組む工夫を教えてください。

→活動の目的を明確にすることが大事であると考えています。単元の最初にまとめまでの見通しを持たせ、単元の最後には生徒自身が活動の成果を振り返ることができるようにします。最終的な目的へ向けた学習の積み重ねを意識させ、達成感や自身の課題を次の学習に生かしていきます。

## 高等学校

⑬ 小・中の変化を受けた、受け入れ側の高校としてのあるべき姿について知りたい。

→listening, speakingを中心に活動してきたことを十分に踏まえ、言語能力の発達を考慮しながら、さらに高度な活動を展開できるような授業を開発していくことが必要です。

→教員全員が、世の中の求める姿や新しい動きなどに常にアンテナをはり、問題意識を持ち、自分のスタイルに凝り固まらず柔軟な対応を心がける姿勢であることが、最重要であると考えます。高校入試を経て入学してくることに変わりないですし、現在でも入ってくる生徒集団の特徴が年度によって異なるのはよくあることですが、前述の姿勢であればその都度入学してくる生徒の特徴をまず捉えることができ、それによって有効な指導体系が整うことになるでしょう。

また、教師個人についても自ずと対応準備を始めるでしょうし、課題が見えてくるでしょう。そして、課題が1人で背負うには大きすぎると気付く頃には、周囲の教員も同じく課題に気付くでしょうから、同じ視線・理解度でお互いに話すことができます。そうやって全体で課題意識が共有され、分担して知らず知らずのうちに、準備が進むはずで

また試行錯誤を全体で共有することで思わぬ解決策にもめぐり合えるでしょう。そうやっていって経験の蓄積が進んでいくと、いつの間にか周りの学校より先を行っている、ということになるかもしれません。無理やり準備・研究体制を整えておくというのもあるかもしれませんが、担当者だけがどんどん先に行くことになり、その担当者からすると同じ理解度で話せる同僚が少なく、ただただ非効率で負担増でしかない状態になります。一番難しいことかもしれませんが、教員の意識レベルを高くする何らかの仕組みを持っていることが、あるべき姿と言えるかもしれません。